

保育者養成機関におけるハンドベルの導入 —その意義, 役割, 教育的効果について
～福島女子短期大学における授業実践(1989～1998)をとおして～

佐藤敦子

福島女子短期大学

1. はじめに

近年、ハンドベルやトーンチャイム等のベルの普及が学校他様々な機関で急速に高まってきている。1979年には第1回の東北ハンドベルフェスティバル(主催:日本ハンドベル連盟)が開催された。この時はわずか3団体しか参加していなかったのであるが、その後、年毎に参加団体の数が増えてきている。第17回大会(1998)には14もの団体が参加した。参加団体は学校などの教育機関に止まらない。知的障害児の福祉施設、教会、社会人一般等団体の層、幅が広がっているのである。

本学主催の幼稚園教諭、保育所保育対象の公開講座でも、関心が寄せられるようになった。実際、保育者養成機関でのハンドベル導入についての問い合わせも増えてきている。ハンドベル演奏をしてほしい、という依頼も多くなった。依頼を受けるのは幼稚園、保育所ばかりではない。知的障害者や老人ホーム等の福祉施設、村おこし委員会、商工会議所、ロータリークラブ、一般企業(福島ルミネ等)等実に様々である。

何故、今ハンドベルに強い関心が寄せられるのだろうか。考えてみれば、ハンドベルは最も時代に逆行した楽器である。例えば、若者を夢中に行っている現代の楽器、シンセサイザーやコンピューター制御の一連のMIDI楽器は、たった一人でもオーケストラやバンドの演奏に似たような事をする事が出来る。様々な音色の音を重ねたり、ずらしたり、という事が簡単に出来てしまうのである。ハンドベルはそういう意味では対極に位置する。つまり、一人では簡単に単旋律ひとつ演奏できない。個人として出来るのは、音階上のたった一つか二つの音でしかないのである。ピアノやバイオリンのような古典的な楽器と比べても最も不器用で「効率の悪い楽器」と言ってよいだろう。

したがって、問題を次のように問い直す事ができる。

(1) 何故、現代的でもなく、「効率の悪い楽器」に今、強い関心が寄せられているというのだろうか。

(2) 果たして学生はハンドベルを演奏するという事に本当に興味や関心を示しているのだろうか。

(3) 仮に、興味を示したとしたら、それは機械的、効率的なものに対するより人間的な何か一集団で協力し合わなければ一人では何も出来ない事が逆に魅力になっていると言うのだろうか。

本論ではこうした問いに、ハンドベルを実際に学生に教え、演奏してきた事(1989～1998)を振り返りながら答える事にしてみたい。

II. 福島女子短期大学でのハンドベルの導入について

(1) 導入の目的

本学でハンドベルを授業として導入するようになったのは、以下のような理由による。

- ①学生にピアノ等の有鍵盤楽器以外の音楽を学ばせ、子供たちにも音楽の楽しさを幅広い角度から伝えて欲しいと考えた事があった。
- ②たまたま学生にハンドベルを聴かせる機会があり、その時に、学生がハンドベルの音色の美しさに強く惹かれていた。
- ③学生は音色に惹かれるというだけでなく、実際にハンドベル演奏したいという意欲さえ示した。
- ④試行的に行ったハンドベルの演奏をとおして学生の中に、責任感、協調性、連帯感が培われ、協力して一つの事に取り組むのに非常に効果があると判断した。

以上のような理由から、本学ではハンドベルをクラブ活動だけでなく、単位の認定制度にまで発展させて導入したのである。

(2) 単位認定の制度

①一般教育科目、音楽演習・時間割外授業

2年間ハンドベルクラブに在籍し、クラブの規則に従って活動に参加する事により単位を取得する。

(1991～1994)

②教育教養科目音楽演習・寮外寄宿生「ハンドベル」授業

全学科対象に開講されるもので、時間割外に週に1度、午後6:00～午後8:00までの2時間授業を受け、単位を取得する。(1994～1996)

③保育科専門科目、専門音楽「器楽合奏Ⅰ・Ⅱ」

保育科1、2年生対象で週に授業時間内に1コマの授業を受け、単位を取得する。(1993～)

実際には①～③共に普通の練習では間に合わずに、演奏会直前は殆ど毎日、放課後の練習が必要となる。

しかし、学生は5時限目にも授業が組み込まれ、他各実習もあるために、練習時間の確保には非常に苦慮する。学生にもかなりハードな練習が要求される。

Ⅲ. 指導の実践

1989年～1991年まではハンドベル2オクターブのみのため、声楽曲やピアノ曲をアレンジしたもので、20ベル前後の使用での演奏が多かった。リズムや拍子も、単調なもの、音符も4分音符や8分音符で、テンポのゆったりした曲が中心だった。

1991年度にトーンチャイムの3オクターブ目を購入し、ハンドベル・トーンチャイムを合わせて3オクターブになる。30ベル前後の曲が演奏可能になった。

1993年度からハンドベルが4オクターブに増え、1994年度には、トーンチャイムも4オクターブになる。1995年度にはベル数が50前後の曲が演奏出来るようになり、和音の響きも重厚になり、変拍子、16分音符等の細かい音符の使用、8分の12拍子の曲での二連符と付点四分音符の組み合わせ、速度の速い曲等、難易度の高い曲の演奏が可能になった。

また1995年度以降は、図書館、美術館、幼稚園、保育所、一般企業、商工会議所等、各方面からの演奏依頼が増えた。

1998年度にはさらに難易度の高い曲を、数曲同時にこなせるようになった。この年7月には、東北ハンドベルフェスティバルや、村の自治会等2回の演奏会と保育所保育対象公開講座での演奏を行った。また12月には、ロータリークラブ、老人ホーム、障害者施設、福島駅前(福島ルミネ)等の演奏の他、幼稚園教諭対象公開講座での演奏を行った。この演奏で、他団体から借用したハンドベルと合わせて、ハンドベル4オクターブを2セット使用した。

Ⅳ. 結果と考察

学生は当初意欲的に取り組むが、一人でも欠けると曲にならない事、鳴らすタイミングの困難さ、そしてハードな練習に、次第に不安や苛立ち、焦りを覚え挫折感を感じる学生が出て来る。演奏会が近づくにつれ、さらに感情が高ぶり、学生は自己コントロールする事の難しさを知る。しかし、10年間を通してそのプレーッシャーに耐えかねてハンドベルを放棄した学生はいない。

ハンドベルの授業、或いはクラブに参加した学生の中には楽譜も読めずに入学して来た学生もいれば、ピアノの授業に追いつけずに、ピアノを途中で履修放棄する学生もいる。逆に吹奏楽部、ピアノ・エレクトーン等音楽経験の豊かな学生もいる。しかし、学生たちはその枠を越え、共に励まし合いながら試練を乗り越え、自分たちの音楽を作り上げていく。演奏終了後自由記述させた学生へのアンケート調査から、学生に大きな感動を与えている事が分かった。最も印象に残った事項として多くの学生が、演奏会まで苦労も多かったが、友人と共に曲を協力して作り上げていく喜びと、自分を乗り越えたという自己への自信を挙げている。

ハンドベルは、学生たちの音楽経験の有無や音楽への各人の個性に関係なく、学生たちの中に協調性、連帯感、責任感を育てると同時に、仲間と一つの事をやり遂げる満足感を感じさせる楽器なのだ。一人が同じ楽器を1つか2つ・3つ受け持ち、瞬時のうちに自分の音を責任持って鳴らさなくてはならない。自分が鳴らさなければ曲が完成されない事が明白になる。それは極度の緊張感を与えると同時に自分の存在を確認できるのだろう。

現代は効率的であろうとするために、個人の人間としての存在感を喪失しがちである。ハンドベルが今日受け入れられたのは、この楽器が最も自分の存在を確認できると実感されたからであろう。